

正倉院薬物（香薬）の調査とその意義

米田 該典（大阪大学大学院医学系研究科医学史料室）

平成 26 年は正倉院薬物の第二次材質調査が行われて 20 年を迎える。その時を切り目に今までの調査事歴とともに、何を知り得たかを整理し、準備している最中に本シンポのことが持ち上がった。本フォーラムの冠名は柴田承二先生である。先生は昭和 23～26 年にかけて行われた第一次調査のメンバーで、第二次調査では関東班をまとめると共に、全体の代表を務められた。同じく木島正夫先生（故人 京大名誉教授）も柴田承二先生と同じく第一次調査のメンバーで第二次調査では関西班をまとめ、調査班の顧問として統括された。第二次調査は総勢 7 名の外部調査員と正倉院事務所の所員を中心に行った。

一次調査は薬事情報だけでなく、機器も施設もなかった時代である。それに較べれば二次調査時は何かと恵まれている。例えば 7 名の調査員は理科学機器の使用を普通の事としている。7 名の調査が理化学的な方向に走ったのはやむを得ないことであったと理解している。

本資料はシンポでの演題とは内容を異にしている。正倉院薬物調査時に行われた香材の調査のことだけを書きとどめた。その意志はたぶん時間的に、この部分には触れることができないのでは・・・との思いからである。ご寛容をお願いしたい。

正倉院薬物の調査

正倉院薬物の調査の歴史は古い。正倉院薬物の調査が専門家によって本格的におこなわれたのは二度しかない。一度目は昭和 23～26 年の戦後の混乱期に行われ、二度目は平成 6 年に始まった調査である。小生は公式には二度目の調査から参加した。

調査の歩みはシンポの中でふれたい。

調査班は代表に柴田承二（東大名誉教授）、顧問に木島正夫（京大名誉教授・故人）の第一次調査の経験者と、五名の大学在籍の生薬研究者で構成された。この調査を通じて関心させられたのは、先の二名の人たちの博覧強記ぶりと正倉院薬物への思い入れのすさまじさである。小生は大阪大学で専門課程へ進学後最初に頂いた卒業研究テーマが正倉院薬物の材質調査を主体に本草書による歴史研究であった。それが後に学位論文になり、正倉院薬物の第二次調査に直接参加することになったきっかけであったように、人後に落ちないほどの正倉院薬物への思い入れはあったが、それでも二方の迫力には躊躇するばかりのすさまじさであった。第二次調査の特徴は、一次に較べて薬物に関する関連情報が質量共に大きく違っていたことと指摘しておきたい。特に海外産の薬物の情報については比較にならないほどに豊富で上質化していたことである。小生が分担調査した香薬は二十種を超えている。全容を紹介する余裕はないので、1, 2 だけを紹介する。

香木類の調査

正倉院の中には素材のまま保存されている宝物もある。そんな素材で最も有名な物は蘭奢待と呼ばれる沈香木かもしれない。長さ一丈五六寸、重さ十一・五^キの巨木である。足利義政、織田信長を始め、明治天皇の勅による切削など、時の実力者によって切られたことも歴史に彩りを添えている。この蘭奢待の内実については諸説があるが、実は科学的な

検討は今回の調査まで一度も行われたことはなかった。宝物だから調査をしなかったのではなく、香木・沈香（じんこう）の研究情報がなかったことが最大の理由である。材質調査の成否は関連情報がどれほど用意されているかによるが、沈香に限らず香木の研究情報は極端に少ない。

正倉院には別に「全浅香」と呼ばれる沈香木がある。大きさは蘭奢待と変わらないほど大きい。当初から此の名のもとで献納され、その時期や由来がはっきりしている。

産地を推測する

庫内の沈香のことが少しずつながら解明されてくると、どこから来たものかを知りたくなる。東南アジア特産の沈香であることから、各地から集めた沈香は500余検体にもなっていた。機器をふんだんに使用して分析し、コンピューターで計算する。その結果芳香成分や樹脂成分だけで産地を推測できることが判明した。その結果、庫内の沈香はインドシナ半島、それもベトナムからラオスにかけての山岳地帯に産することが判明してきた。

素材調査は保存の科学

正倉院宝物の再現が明治以来、連綿と行われ、折りを見て展示公開されている。当代の最高技術保持者を動員していて、再現には形状や外観のみの復元だけに止まらず、材料、加工法を含めて往時の姿を忠実に再現することを基本にしている。その目的は的確に宝物を保存するためには材質や施された加工技術の調査が必要であるからだ。現存の正倉院薬物だけの再現ならば技術的な要求はあまりない。しかし、薬材をちりばめた冠や経筒がある以上、それらの加工に要した関連技術の解明が必要となる。宝物や原材料の産地と思われる海外の各地に伝承される技術の調査も必要であるが、素材の解明はそれ以前に急がれることである。しかし、文化財の素材調査はそれほど進行しているわけではない。研究者が少ないこともあるが、それ以上に大きな課題は方法論が確立していないことにある。無機成分の分析は非破壊検査が可能なレベルに達しつつある。しかし、有機物の分析は破壊しなければできない。文化財なるが故に、形状の変更が許されるとは思えないだけに、簡単には結論が出せない。加えて化学者に共通して、無機物はともかく、有機物は変質するのがあたりまえであると信じているだけに、変質するものの分析の意味を疑問視する向きもある。しかし、ここは発想の転換が必要である。文化財なるが故に保存をしなければならないのであれば、宝物の用材の現状を知ること、加工当初の本質を知ることができる。その後には生じた変化を知らずして講ずべき保存の手段のことがわかるはずもない。保存の研究とはまさに変質の学問なのである。そして、有機物の変質は止まることもなく今も静かに進行中なのである。急ぐ理由はここにもある。

沈香の場合には産地推定を行いうるほどに、現在の沈香と正倉院の沈香の間に変質は認められない。沈香に特有の樹脂が芳香成分を包摂し、変質から保護してきたのであろう。香材や有機物だからといって一様ではない。正倉院の保存では、そこにいたるまでには千二百年以上の時間の経過があつたにも関わらずである。個々の事例で検証を行わなければならないが、研究情報の蓄積はきわめて少ない。保存の科学が求められるゆえんでもある。